

表現ノート集*

北星学園大学 経済学部

増田辰良

2022年10月26日 NO. 25

〒004-8631

札幌市厚別区大谷地

西2丁目3番1号

北星学園大学 経済学部

メール・アドレス: masuda@hokusei.ac.jp

*このワーキングペーパーは、著者個人の責任において書かれたものであり、北星学園大学は、発行管理のみを行っています。

表現ノート集

目次

はじめに

表現ノート集

はじめに

作家たちの創造力を考える。

こんな文章や表現でできますか？ 世に言う作家・著述家たちが書いた文章を読んでいると、凡人には思いつかないような、綺麗なあるはどぎつい文章や表現に出くわすことがある。ワープロで入力すると、そんな日本語表現はありません、という曖昧文の修正を要求されるような言葉たちである。

思わずこの作家の脳ミソはどうなっているのか、と覗いてみたくなることもある。その綺麗なあるはどぎつい文章や表現は草稿の段階で書かれたものなのか、後に挿入されたものなのか、直接、本人に訊ねたくなる衝動を覚えることがある。草稿の段階で既に入っているのであれば、どんな思考回路を経て脳裏に浮かんだのか、を訊ねてみたくなる。

尾崎一雄の文章「ちらと目をかすめただけに過ぎぬ人たちの生活を、そのときの私なりに、いかにふくらまし、でつち上げたことだったろう」(二〇四頁)にあるように、作家は日常茶飯事な出来事を凡人が思いもしないような技法で文章や表現を使って装飾する脳力を持っているのであろう。

そうは言っても作家自身の独創によらないものもある。太宰治の『斜陽』は落ちぶれ貴族であった愛人に日記を書かせ、それを丸写しにした文章もあると聞く。芥川龍之介の『蜘蛛の糸』にも芥川以外の原本があると聞く。

また、綺麗なあるはどぎつい文章や表現は作家に限らず素人も書いている。本稿は、自分の習作のためにそんな綺麗なあるはどぎつい文章や表現を集めてみた。

尾崎一雄「花ぐもり」『まぼろしの記・虫も樹も』講談社文芸文庫、一九九二年所収。

太田静子『斜陽日記』朝日文庫、二〇一二年

中村圭志「健陀多の孤独な戦い 芥川龍之介「蜘蛛の糸」『書斎の窓』有斐閣、二〇一三年一月二日所収。

表現ノート集

黒井千次『時間』講談社文芸文庫、一九九〇年所収。

黒井①：解説、秋山駿

「黒井氏自身もその頃、人間生活二十四時間を八時間ずつ分ければ、日常・仕事・眠り(夢)と三分分されるのに仕事の場面にいる人間を描かぬ文学の在り様はおかしい、とよく発言していた。」(三五五頁)

(増田) お仕事小説が書かれる理由。

黒井②：「花を我等に」前掲『時間』所収。

「雨で黒く濡れている。」

「お部屋のベランダも黒く濡れているだろう。」(二二九頁)

(増田) 雨後の地面やアスファルトの色を表現したもの。

「もし急にガラス戸越しにM氏がこちらをむいた時、自分の顔にうかべる表情を用意しながら(それは、いたずらしている子供をみつけたまま、また文句を言わないでゆったりわらっている大人の顔のつもりだ)、わたしはもう少しM氏をみていることにする。」(二四八頁)

(増田) どう答えるのかを逡巡するときを表現したもの。

「陽はほとんどうすれて、今はもう色のない水みたいだ。」

「まるで自分の中の、自分でもまだ知らないどこかにむけて歩いていくみたいだ。」(二五一頁)

「わたしの前にあるM氏の頬が、深い水をじつとたたえて動かない池の表面のように見えた。」(二五六頁)

(増田) 黙考の様子。

「最後の鉢の次から始まる薄青い壁の空白が、まるで耐えることが出来ない空腹の苛立ちみたいに見える。」(二八一頁)

(増田) これは空白を埋められないもどかしさへの苛立ちを表現している。

「お金は、急ぐ順序に、必要な時に使うために銀行に預けてあるのだから。」(二八二頁)

黒井③：「赤い樹木」前掲『時間』所収。

「俺は病んだ猫が片足を高くあげて一心に自分の尻の穴を舐めるような気持ちでおでん屋に急ぐことになる。」(三〇三頁)

「会社の中というのは、どうして先におこることがこう次々とわかってしまうのだろう。こんなにはつきりしていることばかりならば何も大さわぎをして床面をはりかえまでしてコンピュータを導入することもないだろうに。」(三二三頁)

(増田) うわさ話がどこまでも拡大し、最終局面まで予想されてしまう愚かさを表現している。そこまで予想できるのであれば、機械に頼る必要ないという皮肉に使える。

「机に両手を突き、細い身で立上り、そのまま急に自分の内容がなくなってしまうように彼女は椅子の上に崩れて落ちた。」(三三〇頁)

(増田) 放心した心境を表現。

「噂話というものは、絶対に当人の耳にだけはいらぬような不思議な構造をもっている。」(三三二頁)

「何に対して苛立っているのか自分でもわからぬまま、赤黒い肉で出来た棘に刺され続けるように落着きのない身体の中に、酒はストンストンと面白いように落ちこんで行った。」(三三九頁)

(増田) 酒が胃袋に流れ込む様子。

「『社会実習』なるものがもしあるとしたら、それは自分が完全に「社会」の一部に組み込まれることなしには、到底実現不可能だったわけである。」(三四七頁)

(増田) これは黒井氏が、大学卒業後、数年間会社勤めをしてから、作家になろうと計画し、就職を社会実習の一部として考えていたことへの反省の弁である。一人前になるには、中途半端な考えや行動ではダメということである。

尾崎一雄『花ぐもり』『まぼろしの記・虫も樹も』講談社文芸文庫、一九九二年所収。

「暁方、まだ薄暗いころ、エンドウ畑に近よると、竹の葉に雨がかかるような音がする。無数の夜盗虫が、その小さな口で葉を食う音の集積である。私は、これにも何となく感心した。一所懸命なんだな、と思ったりする。・・・聞いていると、気のせいか、その音は高まるばかりで、何だか壮大な殺戮場面にぶつかりでもしたような妄想さえちらつく始末だ。」(一五五頁)

(増田) 虫が集積して葉っぱを食べるときの凄みを表現している。特に、音から殺戮現場を想像させる。

角野栄子『ズボン船長さんの話』角川文庫、二〇一四年。

「・・・、今までちじ(この「じ」は「ち」の濁音になっているー増田)んでいた船長さんの顔が、とけかけのアイスクリームみたいにやわらかくなって、安心したようにふーっと肩を落としました。」(二四頁)

(増田) 安堵の様子。

「まだわしがわかくて、とびうおみたいに無鉄砲だったころのことを、・・・」(二八頁)

(増田) 怖さを知らない若さを表現。

「目じりのしわがゆつくりほぐれて、にっこり笑いかけました。」(二二六頁)

(増田) 安堵の様子。

「『目的地に直行するのがじょうずな航海とはいえんど。寄り道、これこそ新しい発見につながる』とね。」(一八〇頁)

(増田) 勇気を与えてくれる言葉だ。

「朝はやく、すみれ色のもやのかかった港に、・・・」(二〇五頁)

(増田) 薄明の表現。

「海のほうから、黒い雲のかたまりが頭の上を通りすぎていきます。だれかに追われてでもいるかのように、いそがしい動きかたでした。」(二三五頁)

(増田) 雲が早く流れていく様子。

「ばあさまは、せきといっしょにはきだすようにいった。紙でももんでいるような、がさがさ声だった。」(三二〇頁)

(増田) 老人の衰えた声を表現。

「ばあさまのしわくちやの顔がほろほろとくずれて、かわいいえくぼが両ほほにぷくりとできた。」(三三三頁)

(増田) 老人の歓喜の顔を表現。

「あの水平線のとこまで手をのばしてね、あの空を、本をめくるみたいに、ぺろんとめくってみたいな、って」(三六〇頁)

(増田) 若者が未来への扉を開いてみたいという心情を表現。

大庭みな子「三匹の蟹」『三匹の蟹』講談社文芸文庫、一九九二年所収。

「海は乳色の霧の中でまだ静かに寝息を立てていた。・・・霧の流れていく、濃い乳色の壺の奥でかすかに光っている海・・・。」(七頁)

「横田夫人は・・・鼻の脇に貧しい皺を寄せて笑った。華やかなひまわり色の装いの中ではその貧しい皺は、く、く、という小鳩のようなしのび笑いの中で、女らしいつましやかさを想わせる翳にしかならなかったが、もう四十年たったら、ひ、ひ、ひ、という猿のような笑いになるのだわ、・・・。」(三二頁)

「バラノフ神父はウオツカをストレートで飲んでいて、鼻の頭が桜ん坊のようになっていた。」(三一四頁)

「男と女なんて、一度傷つけ始めると深く刺さった棘がいじればいじる程深く奥に入っていくみたいなもので、苦い渋だけが口の中に残ることが、多いから」(四〇頁)

大庭みな子「火草」前掲『三匹の蟹』所収。

「彼は目をあげて山を見た。山肌は黒い美しい獣の毛を逆立てたように輝いていた。のどを鳴らす狼の反った背のようであった。」(七九頁)

(増田) とてつもなく大きな決断をする様子を表現したもの。

「物事を何でもあまりはつきりさせることはよくないことだ。なるべく曖昧に、そしらぬふうに、ぼんやりと感じさせるやり方がいい。そうすれば、その中に、お前の言い度いことを他人が言うてくれるよういなる。」(九六頁)

(増田) 他人との付き合い方を表現したもの。

大庭みな子「青い狐」前掲『三匹の蟹』所収。

「ひつぎにはいつて肉がくずれても、美女をあつめて伽をさせ、女たちを、腐臭に鼻を覆つたというとがで、牢に送ろうと、もがいているような墓であった。権威をほしいままにした、肩をそびやかした、驕慢な笑いと、冷淡な眼と、薄い笑いを浮かべた唇を持った墓であった。」(二一六頁)

(増田) 傲慢な権力者を表現したもの。

「父の手は冷たくて、彼女は死人にさわられたような気がした。」(二二七頁)
(増田) 手の冷たさを表現したもの。

大庭みな子「**棧橋にて**」前掲『**三匹の蟹**』所収。

「赤い髪の女の声は乾いて、風できしむ古い扉のようだったが、彼女の唇は濡れた爬虫類の脇腹のように光っていた。」(一五二頁)

「気がついていることを気づかないふりをしてつじつまを合わせることが秩序というもんだ。気がついたことをが鳴りたてたりしてみろ、みんな滅茶苦茶に收拾がつかなくなってしまふ。そういうのを破壊主義っていうんだ。」(一五八頁)

「雪の山の間から陽がのぼり、ふれると指が青く染まるみたいな空をゆつくりと陽がよぎり、海のみこうに沈むまで……。」(一六〇頁)

「白いすき透った春雨みたいな足をひらひらさせて」(一七六頁)

「気分が悪いのかい？」夫に肩をさわられると彼女はまるで枯木の上に生えていたきのこみだいにぼろりと其処にくずれおれてしまった。」(一八三頁)

「海は薄い墨色に風いでいた。」(一九一頁)

渡邊美江子「**すすけた看板**」『**童話の花束**』第二六回JOMO童話賞作品集、株式会社ジャパンエナジー広報部、一九九五年所収。

「かな子は、自分の顔から湯気がでていのではないかと思うほどだった。真つ赤になっているかな子をよそに……。」(三頁)

(増田) はじらいの表現である。

富吉宮子「**雨の月曜日**」前掲『**童話の花束**』所収。

「チョウはふわふわと風に流されたように飛んできて、不時着する飛行機みたいにおなかから水たまりに落ちた。」

(一一頁)

山岸亮一「**かわいい魔女**」前掲『**童話の花束**』所収。

「心がほかほかしてくるようなふしぎなチューリップの絵をみると……。」(一九頁)

溝口文「**あいつ**」前掲『**童話の花束**』所収。

「いちようたちが、春風の中で、うすい緑色の新芽を、キラキラと光らすのを見るのは大好きだし、秋になると、糖蜜色の夕日と、黄金色の葉っぱが、いっしょになってえがきだす……。」(三〇頁)

三枝寛子「**さかなのボタン**」前掲『**童話の花束**』所収。

「この町ににげてきたとき、一番やさしい人が住むうちは、すぐにわかりました。このじまんのひげアンテナがね、むずむずつと、ふるふるつとしたから。生ゴミ置き場で、エビフライのしっぽを探しあてるときみたに。」(三四頁)

(増田) 猫が、自分を飼ってくれる主人をみつけたときの直感を表現したものだ。

富岡多恵子「私生活と私小説」『表現の風景』講談社文芸文庫、二〇二一年所収。

「日記帳を買うひとの多くが、それを三日坊主に終わらせるのは「日常」を記す退屈と困難に降参してしまうからである。

特別になにも起こらない、なんにもない日といっても、その日はその前日とはちがうのであるが、そのちがいが書けなければ、書く方が退屈するのは当然である。また、その日が、その前日と、時間のつづきであって、いかに特別のことが起こっても、さして変わるものでないとの認識があつてこそ、特別のことも書ける。」(二七頁)

(増田) これは日記帳を買った人が日記を付けるのに三日坊主で終わってしまうことを表現したものである。

「時代は、読み手の大衆化から書き手の大衆化へすすみ、「私生活」の書き手はふえてきている。それら、いわば、「小説」の素人たる「私生活」作家(?)と「私小説」作家とのちがいは、小説技術以上に、「私生活」の内容を見る態度のちがいであろうが、「私生活」作家はおおむね無邪気である。」(四四頁)

(増田) 素人とプロの作家との違い。

富岡多恵子「小説の変容」前掲『表現の風景』所収。

「この、十年後に書き変えられた小説を読んで、美術館の「作品」群の中から外へ出て目に入る樹木や空に感動するのと同様なものを感じたので、それがなぜかを考えようとした。」(八四頁)

(増田) 以前に読んで、難しいと感じた文章が著者によって推敲され書き変えられたことによって、読みやすくなったことを表現したものの。感動のあまり、なんともすがすがしい気持ちを表現したものである。

富岡多恵子「敗北した子供の物語」前掲『表現の風景』所収。

「ひとが、なにかを語ろうとする時、エヘンとかオホンとかの咳ばらいをすることによって、まずは悪魔祓いをして、言葉を外に出すことのタブーに対して勇氣をふるい起すように、……。」(一七三頁)

(増田) 何か気まずいこと(タブー)を公言するときの表現である。本文は、こんな簡単にはすまされない内容である。

富岡多恵子「著者から読者へ」前掲『表現の風景』所収。

「わたしは自分の小説がつくられていく表現の風景は書くことはできないし、できてもしたくはない。つまり、それは自分がつくったもの、表現したものの説明になるからである。わたしはずっと、自分のつくったものの前に作者がシャシャリ出て説明するのを嫌ってきた。つくったもの(書いたもの)がモノをいわなければ、作者が説明しても仕様がなし、書いたものがモノをいえば、作者はなにもいする必要がないからである。」(一一五頁)

(増田) 作品や物の価値は、読者や利用者が決めること、であって作者が語ることではない。他人が利用してくれる、評価してくれるモノを創れということである。自己主張のしつかりした「モノをいう作品」を書けということである。

森敦「浄土」『浄土』講談社文芸文庫、二〇二二年所収。

「……たまたま櫛比するビルの間から、取り残されたような鐘堂が現れた。」(一一頁)

(増田) 林立するビルの間から見える光景を表現したもの。

「大谷という女の子は走り出し、わたしが校門にはいつたときには、校庭には炒り豆をころがすように子供たちが走り回っている、どこにいても分らなかった。」(一四頁)

(増田) 無数の子供が活発に動き回っているさま。その中に人が紛れ込んで、どこにいるのか分からないさま。

森敦 「吹きの夜への想い」前掲『浄土』所収。

「山々が色づいて来て、・・・その美しさは時の間のことで、樹々は葉を落として山々は駱駝色になった。」(六〇頁)

(増田) 秋から冬になる景色を表現したもの。

「幸い、そこは・・・暗く、清美さんは心して背を向けているが、湯気のせいか灰白く浮き立って見える。わたしははじめて女に接しようとしたときのような、震えが来るのを身内に感じた。」(六四頁)

(増田) 心を寄せる女性の入浴シーンを見たいけど見てはいけないというどきどきした心情を表現したもの。

中村文則 『銃』河出文庫、二〇一二年。

「この三日、雨はまるで何かに取り憑かれたように降り続けた。」(二二頁)

(増田) 雨がひっきりなしに降る様子を表現した。

花井哲郎 「シジミとランギア」『カイミジンコに聞いたこと』中公文庫、二〇一二年所収。

「じゅり」と歯で砂が砕かれる音は強烈で、頭蓋骨に直接響き、それまでの長閑な味わいが一瞬にしてふっ飛んでしまう。」(八十五頁)

(増田) これはシジミの砂を完全に吐かせないまま味噌汁に入れたがゆえに、「じゅり」と砂をかんだときの、あのいやな感触を表現したものである。確かに、頭蓋骨に響く感触である。

花井哲郎 「草夾竹桃」前掲『カイミジンコに聞いたこと』所収。

「・・・木立は日陰を作って、木の葉が落とす柔らかい陰が、風にひらひら揺れていた。」(九九頁)

(増田) 木漏れ日の中の葉っぱが風に揺れている様子を表現したもの。この光景は臉に浮かぶ。

花井哲郎 「意地」前掲『カイミジンコに聞いたこと』所収。

「意見を素直に受け入れる心は、意見に逆らう心を経て初めて本物になる。これを経ない素直はふぬけであるが、・・・。」(一五八頁)

(増田) 逆らって、幾度か失敗を重ねないと、人の意見を聞ける素直な心にはならない。

花井哲郎 「糞」前掲『カイミジンコに聞いたこと』所収。

「ある種の巻き貝やエビ・カニの仲間は、腸から粘液を出して粘液囊で糞を包み紐のような糞が散乱しないようにしている。このような糞は、粘液囊に包まれたまま水流で遠くまで運ばれる。」

粘液嚢は袋の役を終えれば海水中で短期間に分解してしまう。ビニールのごみ袋のようにいつまでも分解しない袋よりも、はるかに合理的で海を汚さない。」(一八八頁)

(増田) 自然の中からヒントを得て人間に役立つものが多く造られてきた。こんな袋を製品開発できないだろうか。

花井哲郎 「底なし三角形―自然史科学教育私見―」前掲『カイミジンコに聞いたこと』所収。

「説明の論理を重要視した教科書から、発見に寄与するような思考を強調する教科書への移行は、すぐにでも実施すべき重大な問題のように思われてならない。これは人の模倣に強い生徒を養成するのか、自分で未開の分野を開発することができる能力を持った生徒を育てるのか、といった自然科学教育の根本的な問題と関係するからである。」(二四四頁)

(増田) 自然科学に限らず、社会科学にも通じる意見である。

「卒業論文でみっちり野外調査をやった学生は、こちらから指図がなくても、自分の部署の問題は一人で見つけて処理してくれる。」(二四四頁)

(増田) 卒論を作成させることは意義深いことだ。

梅崎春夫 「風宴」『桜島一日の果て―幻化』講談社文芸文庫、二〇二一年所収。

「何故ともなく私は数え切れぬ疲労をどっと感じ、肩を海月(くらげ)増田)のように落としたが、そこにある露地の中へ入って行った。」(十頁)

「会話の何処かに穴があいて、すうすうと風が吹き抜けるような気がする。その穴を埋めようと私達はいろんな冗談を持ち出して努力したが、どうしても食い違ってしまう。」(二二頁)

「・・・同性愛というものでしょうねえ」

蛇の肌をぬらぬらとこすりつけられたような気がして、私はぞっとして女中の顔をみた。卑しむべき痴呆の臭いがした。」(三〇頁)

(増田) いかにも拒否したい表現である。

「私の心の中から、潮騒に似た音を立てて、さまざまな言葉が出てきた。」(四〇頁)

「電線をふるわせて風が吹いて、赤門前に散らばった数知れぬ銀杏の落葉が一せいにがさがと奔った。恐ろしい速力で左へ右へと動き廻る。数千匹の黄蟹が何者かに追われて必死に逃げまわるように、私の酔眼にうつって来た。今宵は蟹のお祭りだ。今夜は風の宴だ。遁走する蟹の大量の後方から、風がひょうひょうと音立てて吹き付けた。」(四五頁)

(増田) イチョウの葉っぱが風に吹きまわされる光景を蟹の逃走に例えた表現。本書のタイトルはここに表れている。

「私たちは黒い露地の土を踏み、侘しい明るさを拾いながら、通りの方へぞろぞろと出て行った。」(四九頁)

(増田) 露地〓侘しい場所〓仄暗い場所、かすかな明かりを頼りに足元を見ながらの歩行を表現したもの。

梅崎春夫「桜島」前掲『桜島一日の果て一幻化』所収。

「……突然臉を焼くような熱い涙が、私の眼から流れ出た。……風景が涙の中で、歪みながら分裂した。……ただ涙だけが、次から次へ、臉にあふれた。」(一二二頁)

(増田) 戦争の苦痛から解放された心の安堵を表現したもの。これまで私は他人の評伝を書くという仕事を軽んじてきたが、こうした作品を読むと、作家の精神の出所を探ってみたくなる。耐え難いほどの感動を受けると、その根っここの部分を掘ってみたくなるというのも分かる気がする。

梅崎春夫「日の果て」前掲『桜島一日の果て一幻化』所収。

「反射で瞳の色も染まりそうな明るい盆地の展望があった」(一四七頁)

「彼はかさぶたを一気に剥ぐような苛烈な快さを感じながら、一言ずつ力をこめて言った」(一四九頁)

「背筋に粟の立つような嫌悪感が……を襲った」(二七八頁)

(増田) この文章の「粟の立つような嫌悪感」は理解できない。粟が背中に入り、いずい感覚を表現しているのか。

武田泰淳「めがね」『ニセ札つかいの手記』中公文庫、二〇二二年所収。

「老婆のうすく赤くむくれた臉のふちに溜まった眼やに。黄色い膿がカステラの上の砂糖のように固まっています。」(三〇頁)

武田泰淳「女の部屋」前掲『ニセ札つかいの手記』所収。

「今まで古沼のように無気力にしまりかえっていた店の内部は、たえず出入りする朝鮮の男女の口々に叫ぶ激論のため、発見されたばかりの油田のように沸き返っている。」(一三七頁)

武田泰淳「白昼の通り魔」前掲『ニセ札つかいの手記』所収。

「……生活テキにも苦しくて……。」(一八〇頁)

(増田) 近頃といっても、ここ数年ではなく、もう少し前から「……私的(わたしてき)＝自分的(てき)には……。」という言葉が若い人たちの間で使われ、頻繁に耳にする機会がある。「的」は中国語では所有格の「の」を意味するように思う。「これは私＝自分的には好きな色だ」と言えば、「これは私が＝の」好きな色」の意味である。若い人たちも「の」の意味で使っている場合が多いように思う。

この「的」、近頃の日本語かと思いきや、武田泰淳「白昼の通り魔」『ニセ札つかいの手記』中公文庫、二〇二二年、一八〇頁に漢字ではないテキ表現を見つけた。意味は今、使われている「的」と同じである。この「白昼の通り魔」の初出が昭和三五年の『小説中央公論』(十月号)なので、漢字にこそなっていないが、的＝テキという表現は日常の中で使われていたことが窺える。もともと漢字でなく、カタカナ表記にしているところを見ると、まだ市民権を得ていない表現法だったのかもしれない。

ところで、この「的」が語尾につくと、どこか語意が曖昧なものに思えてくるのだが。質(量)的、積極(消極)的などのように。

ただし、先ほども記したように公的意見とか私的意見というように「的」はすでにはるか昔から「の」の意味で使用されていた。公的意見、個人の意見という意味である。これであれば曖昧

さはない。

今が昔と違うのは、何にでも「的」を付けたがる点であろう。色的には、音的には、ファッショナル的には、犬(猫)的には……のように。

黒井千次氏も、この最近流行の「的」に気づかれ、特に、話し言葉に使われるかぎりでは多少、許されようが、書き言葉に入ってくると相当な違和感を覚えるという。

「僕の」というのはおかしいが、「私的」であれば、シテキと音読すれば、「公的」の反対語として通用してきたし、ワタクシテキと湯桶(ゆとう) 読みすれば、とたんに怪しい言葉へと変身する。

このあたりの怪しさに目をつけ、

「△公△に對立する△私△を更に△僕△へと個人化し、△私的△が△僕の△になったのであろうか」(一六頁)と推測されている。

こうなれば、どんな言葉の語尾につけようが、勝手気まま、自由である。こうした曖昧語尾が流行るのも、断定を避け、言葉を曖昧なままにさせる社会的風潮の一つであろうとみている。増田には責任を回避する便法のようにも思えるが。

黒井氏のエッセイ(初出は二〇〇二年『群像』二月号)とは前後するが(二〇一三年五月に一日、日曜日)、今日(二〇一二年十月十五日、月曜日)、講義の合間に読んでいるツヴァイクの翻訳の中に、この「的」を見つけた。

先ほど書いた、

「近頃といつても、ここ数年ではなく、もう少し前から」は、この翻訳が出た頃(一九九六年)のように思えてきた。訳者はそんな時代の流行り言葉に影響を受けたのであろうか? その出所は、

「……ローマ的の意味における……」(シユテファン・ツヴァイク(片山敏彦訳)「ビザンチンの都を奪い取る」『人類の星の時間』みすず書房、一九九六年、八四頁)である。

しかし、この「的」はもつとはるか昔から使われていたものだと思う。きつと言語学者に聞くと、平安の時代から使われていましたよ、という答えが返ってきたきそうである。

黒井千次 「言葉の漂流」『生きるということ』河出書房新社、二〇一三年所収。

黒井千次 「ビル・ビリリは歌う」『石の話』講談社文芸文庫、二〇〇四年所収。

「……まるで昆虫の巣のように部屋達がごまかく区切られ……」(八頁)

(増田) これはビルの各階にある部屋の並びを表現したものだ。昆虫の巣として、蟻や蜂の巣を思い浮かべればよい。

黒井千次 「声の山」前掲『石の話』所収。

「……ブルーのベルトのついた腕時計は今も目のすぐ裏にあるのに、一週間前から姿を消していた。」(七二頁)

(増田) 紛失した大切な物を表現している。

黒井千次 「石の話」前掲『石の話』所収。

「ひっそりと寡黙でありながら、ケースの中には鋭く叫ぶ透き徹った光の言葉が飛び乱れていた。どの石も身を引き締めて小さかったが、これまでの色を誇る石が取り澄ました顔で座り込んでいるのに対し、ここの石はリングから差し伸べられた冷たい爪の間にしっかりと直立しているのが感じられた。」(九六頁)

(増田) ガラスケースの中にお目当ての婚約指輪を見つけたときの表現である。

「くくくくくくく、と笑い声を字で書いたようにわざとらしく咽喉を鳴らしながら……二人の若い女性が前に立っていた。」(九八頁)

黒井千次「袋の男」前掲『石の話』所収。

「人気がない暗い道の傍で、街灯の明かりを受けて蹲っている彼等(ゴミ袋のことー増田)には一種独特の表情があった。屋根の下の暮らしから切り放され無用のものとして捨て去られたゴミ達は、自らの境遇を嘆いたり呪ったりするのではなく、むしろ無気味に自足して、寄せ合ったポリエチレンの薄い肌越しになにごとかかをひっそりと伝え合っているように感じられた。その横を疲れた身体で過ぎる時、僕は不快さよりむしろ言いようのない親しみを覚えるのが常だった。よし、帰ったらすぐお前達の仲間を連れて来るからな、と声には出さずに電柱の下の彼等に呼びかけた。

△燃えないゴミ▽……彼らの表情はどこか乾いていてよそよそしかった。積み上げられた袋を一瞥しただけで、僕にはそれが△燃えない▽連中であることをすぐに言い当てられたろう。ただ空罐や瓶やプラスチックや金物……彼等には台所の流しにある水切りの容器から移されたり、紙屑籠から掴みだされたりしたゴミに備わる優しさが欠けていた。かさばりが大きいのに持つと意外に軽いに違いないそれらの袋は、虚勢を張って空意地だけで生きているように思われた。彼らの横を通り過ぎてものなにかを囁きかけようとする気にはなれなかつた。」(一一五頁)

(増田) △燃えるゴミ▽に対して異常なまでの執着心をもつ男の感情を表現したもの。
「……そこには腹を喰いちぎられ、臓物を道の上に引き出された袋が無残な姿で横たわっている。」(一一六頁)

(増田) これはゴミ収集場所に置かれた廃棄物の袋が何かの動物(犬、猫、カラスなど)によって噛み破られている光景を表現したもの。

ゴミ袋に異常な執着心をもつ男にとって、袋は擬人化され

「無抵抗なゴミの袋の噛み破られること自体が耐え難い。」(一一六頁)となる。

黒井千次「庭の男」前掲『石の話』所収。

「激しい日差しが窓の外で踊っているために、家の中は洞窟のように薄暗く感じられる。」(一九九頁)

(増田) 家の外と内との温度差を表現したもの。

「左隅の女だけ半裸の抱擁シーンに妻は気づいていない様子だった。なにか得したようなつもりで私は黙っていた。」(二一〇頁)

(増田) 男としての自分の目線と妻の目線の違い。妻が半裸に気づいていれば、男は、まあ嫌らしい!と小ばかにされたであろう。揶揄されずにすんだことが得した気分という表現になっている。この感覚は男でしか分からないかもしれない。

「熱くなった頭から言葉の棘が飛び出していた。」(二二三頁)

(増田) これは人をなじるときのきつい一言を表現している。この文章の前に「鈍いんだよ。老

化だぞ、それは」(二二三頁)がある。

黒井千次「散歩道」前掲『石の話』所収。

「……自由への道は無原則的に自由なのではなく、やはり自由を目的にした選択に基かねばならぬ、と彼は学んだ」(二一九頁)

「……風の向きは気儘に変わって黒い傘を弄ぶ。暴れる生き物に似た傘と闘ううち、上と下から水に攻められた……」(二四四頁)

(増田) 風に翻弄される傘の動かし方を表現したもの。

吉村昭「メンチ、コロッケ」『月夜の記憶』講談社文芸文庫、二〇二一年所収。

「その折の私の気分は、体内に風の鳴るような怪しいものであった。」(三〇〇頁)

(増田) これは会話から完全に無視をされたときの気分を表現したものである。

パウロ・コエーリヨ(山川鉦矢・山川亜希子訳)『アルケミスト 夢を旅した少年』角川文庫、二〇一三年。

「決心するということは、単に始まりにすぎないということだった。決心するということは、まるで、急流に飛び込んで、その時には夢にも思わなかった場所に連れてゆかれるようなものなのだ。」(八〇頁)

「……旅人たちは絶え間なくしゃべり、笑い、叫んでいた。まるであの世から、もう一度人間の世界に戻ってきたかのようなようだった。みんなはほっとして幸せだった。」(一〇四頁)

(増田) 旅の途中の難儀が去って、ほっとした安堵感を表現したもの。

「……夢の実現を不可能にするものが、たった一つだけある。それは失敗するのではないかと
いう恐れだ」(二六八頁)

「私たちが良くなるか悪くなるかによって、私たちの住む世界は良くも悪くもなります。そして、
そこで愛の力が役に立つのです。なぜなら、私たちは愛する時、もっと良くなるように必ず努力する
からです。」(二七九〜一八〇頁)

三浦哲郎「石段」『拳銃と十五の短篇』講談社文庫、一九八一年所収。

「二年生の下の子になると、もう後で綱を引いても踏ん張りが利かない。運動会の綱引きの
負けチームのように、一と足一と足、ひきずられてしまう。」(八八頁)

(増田) これは犬の散歩中に子供が犬に引きずられる様子を表現したもの。

三浦哲郎「小指」前掲『拳銃と十五の短篇』所収。

「触ってみると、思いのほか柔らかくて、すこし熱を持っている。日なたで熟れすぎた鬼灯(ほ
おずきー増田)に似ていた。」(一〇二頁)

(増田) 傷口が赤くぷっくりと膨れ上がっている様子。

三浦哲郎「義妹」前掲『拳銃と十五の短篇』所収。

「最初から本気で別れる気持などないのに、室戸との仲が冷え込んでくると、灰に埋もれた燠火

「おきびー増田」でも掻き立てるようなつもりで家を飛び出してくるのだろうか」（二六八頁）
（増田） いらいらしたときの動作。

三浦哲郎「**凧**」**前掲『拳銃と十五の短篇』**所収。

「・・・糸の切れた凧は、もう自分の力じゃ戻ってこれないんですね。」（二〇九頁）
（増田） 例えば、家出をした人間はその期間が長くなるほど、家族の元へは自分から帰れない、という意味である。誰かが迎えにいくしか手はない、ということ。

講談社文芸文庫編「**ひろしのしょうばい**」『**日本童話名作選**』**講談社文芸文庫**、二〇〇七年所収。

「さくらの木は、数えきれないもも色の花びらにすっぽりくるまれて、ふわんふわんしてる。」（二〇二頁）

（増田） 確かに、さくらの花びら群が皐月のそよ風に「ふわんふわんしてる」光景が目に見えぬ。

永井龍男「**出入口**」**佐藤雅彦編『教科書に載った小説』ポプラ文庫**、二〇一二年所収。

「他人の靴の持つ、得体の知れぬ内部の不潔さが、足の裏から染み込んでくるような感覚にとらわれたからであった。」（二一九頁）

「・・・車窓を横なぐりにかすって行く無数の雪が見えた。なにもかもを、一瞬のうちに過去にしてしまうような速さで、それは続いた。」（二一九頁）

「ヘッドライトに照らし出される雪も、ネオンに染まる雪も、東京に降る雪は車におびえ切って、身の置きどころがなさそうであった。」（二二七頁）

佐藤さとる「**この先ゆきどまり**」『**佐藤さとる童話集**』**ハルキ文庫**、二〇一〇年所収。

「枯れかかったつる草の葉が、裏から日の光を受けて、まるで電灯がついたようにきれいな黄色に輝いていました。」（一九五頁）

（増田） 枯れた葉っぱの裏、日の光、から電灯の輝きを連想する表現。

村山由佳「**約束**」**集英社文庫編集部編『短篇工場』集英社文庫**、二〇一二年所収。

「おばさんの丸っこい体の中には、何だかわからないけれども幸せなものがいっぱいつまっていたような気がしていたからだ。」（三九一頁）

（増田） これは、かつてはぼっちゃんとしていた母親が不治の病に罹った子供の行く末を案じるが故に日増しに痩せ細っていく様を表現したものである。実は、ぼっちゃんとした体型には幸せがつまっていたのである。

「約束を果たすには力がある。どれほど固く交わされた誓いも、どんなに強い思いでさせも、それだけでは何の意味もない。実現させるには、実現させるに足るだけの力が必要になる。」（四三六頁）

（増田） 若いときには、この力が無いのである。いや、まだ力がついていないのである。

赤染晶子『**乙女の密告**』**新潮文庫**、二〇一三年。

「それはもはや欲求である。渴いた喉が水を求めるみたいに、なくてはならないものを求めている

る。みか子は渴望しているのだ。」(二〇頁)

(増田) 何かを必死になって思い出す様子を表現したもの。

平山瑞穂『あの日の僕らにさよなら』新潮文庫、二〇一三年。

「知識なんてものは……」

「後からどうにでもなる。大事なのは知識じゃない、進もうとする意志だよ。自分がどこかに向
っているという感覚、ただ立ち止まってるだけじゃなくて、ここではないどこかに行こうとして
るっていうその感覚が常にあるかどうかが大事なんだよ」(二五五頁)

「周波数が合わせられない、という感じがする。」(二八七頁)

(増田) これは相手との間が合わないことを表現したもの。

「気が滅入ってくるような住居だった。朽ちてしまった希望、ついでてしまった夢が行き場もな
く澱み、その場で発酵しはじめているような。」(三二四頁)

(増田) これは人生の敗北者の住まいを表現したもの。

Lily『一インチのピンヒール』小学館、二〇一三年。

「今日の嘘をかばうようにして、また明日、その上に嘘を重ねなくちゃならなくなる前に、嘘が
本当になったら、どんなに楽だろう」(五九頁)

東直子『とりつくしま』ちくま文庫、二〇一一年。

「青いの?」そのひとの二つの黒くて丸い目のあいだが、すうっとひらいた。」(四九頁)

(増田) 不思議そうに相手を見る様子。

梶山季之『せどり男爵数奇譚』ちくま文庫、二〇一二年。

「古本屋仲間で、厭がられる商売の仕方に、新規開店の店へ行って、必要な古本だけを買うのを、
俗に「抜く」とか「せどり」と云うんですよね……。」(四五頁)

(増田) 題名の「せどり」の意味。

「人の牛蒡で法事をしようと言う訳である。」(一六九頁)

(増田) 他人が持ってきた牛蒡で精進料理を作り、法事を済ませること。自分の用を果たすため
に他人のものを利用したり、他人に便乗したりすることのたとえ。

諸田玲子『コロッケ』『思い出コロッケ』新潮文庫、二〇一三年。

「春から夏、夏から秋……今年も季節が上すべりをして、知らぬ間に過ぎてしまったような気
がする。」(二六頁)

「肉屋の親父が、期待を込めて大きな鼻の穴をふくらませる。」(三〇頁)

「よかないよ。恥は一瞬、写真は一生」(二二四頁)

木山捷平『空閑』『落葉・回転窓』講談社文芸文庫、二〇一二年。

「あの不安な幼な顔を思うと胸がたまらなかった。」(五一頁)

(増田) これは山羊の目つきを表現したものである。確かに、山羊の目つきは自信を持って何か

を見ているようには感じられない。どこかおどおどしたような不安げな表情をしている。「空聞」は、くうけい、と読む。

「最後に霜子は、頭を地べたにすりつけ、泥をなめるような深いお辞儀をして、角太郎の家をでた。」(五七頁)

(増田) これは平身低頭を表現したものだ。

木山捷平「増富鉱泉」前掲『落葉・回転窓』所収。

「時刻は午後になったばかりで、天気は上々の小春日和だった。道はいわゆる葛折りに曲がって来て、その曲がり工合によって、太陽が山の上に乗ったり沈んだりした。歩き工合によって、道は朝の九時頃の気配になったり、十一時頃になったり、夕暮のふんいきになったりした。私は一日のうちに一週間も旅行をしているような気持だった。」(七〇頁)

(増田) これは山の葛折りを太陽の位置によって表現したものだ。

木山捷平「留守の間」前掲『落葉・回転窓』所収。

「エサにありついた鶏が逃げて行くように、子供たちがつれ合って人家のある方角に向って駆け出した。とその時、正介の目と少女の目がかちあつた。」(一八三頁)

(増田) これは腹を空かした子どもが、おやつを手に入れ一目散にどこかへ駆け出すようすを表現したもの。

木山捷平「好敵手」前掲『落葉・回転窓』所収。

「大昔から強い方が黒を、弱い方が白を持ったんだって。玄人素人という言葉もそこからきているんだって」(二二六頁)

(増田) これは囲碁の黒石と白石を表現したもの。本当なのかな。

木山捷平「七人の乙女」前掲『落葉・回転窓』所収。

「・・・、山の上を心の中に描き出すように言った。」(二四六頁)

(増田) ある状況を思い出すときの表現として使える。

安部公房「老村長の死」『題未定』新潮社、二〇一三年。

「・・・子供達も大人しくなつて囲炉裡の周囲に丸くなって居た。それは一番上の娘が食器を箱の上に並べ始めたからだ。食事の前と云うものは、誰に取つても一番神聖な時なのだ。絶対服従を余儀無くさせられる。」(九四頁)

(増田) これは駄々っ子も食事の前にはお行儀が良くなることを表現したもの。

安部公房「白い蛾」前掲『題未定』所収。

「・・・普通つまらないとか、大人気ないとか言われている事が、案外目に見えない所で人生の大きな役割を占め、時には主題にさえなっているものです。目に見えているものは、その奥に在る大きな塊りの様々な性質を、ばらばらに示している仮の宿で、影の様なものだというのが私の意見です」(二四三頁)

(増田) 大切なことは目に見えないことを表現したもの。

安部公房「虚妄」前掲『題未定』所収。

「一体この世に真に理解し得るものが存在するだろうか。僕等は自分の指を恐ろしいと思ったり、物が上から下に落ちるといいうので蒼くなったりすることはない。ただそれが僕等に新しい理解を強要するものであることに気付いたとき恐れ蒼ざめるのだ。」

(増田) 普通のことを改めて考え直し、違った理解を得たときの驚き? を表現したものだ。

安部公房「鴉沼」前掲『題未定』所収。

「・・・感傷とは文字通り感情の過多に亡ぼされることだ。」
(二六三頁)

安部公房「キンドル氏とねこ」前掲『題未定』所収。

「空腹にちいんと滲込んでかつかとほてりだすアルコールのように「聯の記憶が血管の隅々にまでびびいていった。」(二七五頁)

(増田) 何かを思い出す様子。

ローリングス『仔鹿物語(上)』光文社、二〇一二年

「・・・ブドウも、・・・。細かいレースのような花で、・・・。」(二四一頁)
(増田) ブドウの花を表現したもの。事実、花はレースのようである。

「ペニーに向って皆がいつせいに口を開いた。言葉に出すことによつて、心の内側に食いこんでいく痛みがいくらか洗い清められるようだった。ペニーは、ときどきうなずきながら厳しい表情で耳を傾けた。小さく頑丈な岩に向つてフォレスト一家の人々が痛恨の嘆きをたたきつけているような光景だった。」(四〇〇頁)

(増田) 肉親の死に到った経緯をわれ先にしゃべることによつて悲しみを和らげようとしていることの表現である。

「・・・、人の心はみんな同じだ。悲しいことは、だれの身に起こつても悲しい。表れかたがちがうだけだ。ときどき思うんだが、悲しい思いをして、おまえは口がきつくなつただけだったのかね。」(四〇八頁)

「ペニーの女房は、・・・きつくならなきや、耐えられなかっただけさ」(四〇八頁)

カポーティ(川本三郎訳)「ミリアム」『夜の樹』新潮文庫、二〇一二年所収。

「・・・は頭を下げ、暗闇で穴を掘っているモグラのように、他のことは何も考えずに道を急いだ。」(十一頁)

(増田) ただ一心に目的地へ急ぐ様子。

「・・・は、むさぼるように食べた。サンドイッチとミルクを終えると、指を蜘蛛が巣を作るように皿の上に動かして、パン屑をかき集めた。」(二二頁)

カポーティ(川本三郎訳)「夜の樹」前掲『夜の樹』所収

「夕暮れどきに雨が降った。そのために出来た氷柱が、水晶の怪物のおそろしい歯のように、駅

舎の軒からぶらさがっていた。」(三八頁)

カポージェイ (川本三郎訳) 「夢を売る女」 前掲 『夜の樹』 所収。

「車が一台、歩道の縁石のところまで雪に埋まっています、ヘッドライトを点滅させている。まるで心臓が急に痛くなつて、言葉ではなく光で助けて、助けて！ といっているようだ。」(九七頁)

(増田) 事故った車のライトの点滅が助けを求め人の心境を表現。

カポージェイ (川本三郎訳) 「無頭の鷹」 前掲 『夜の樹』 所収。

「……、ブレイキのきしる音が聞こえた。突然、綿の耳栓が耳からはじけとんでしまったように、町の騒音が一齐に耳に飛び込んできた。」(一四六頁)

(増田) 静寂を破る音を表現。

「台所では冷蔵庫が、大きな猫が喉を鳴らすような音をたてている。」(一七七頁)

(増田) 冷蔵庫のモーター音を表現。

「急ぎたかつたし、急がなければならぬこともわかっていたが、空気には、ねばねばした液体がぶあく張りついているようだった。」(一八四頁)

(増田) 急いで行きたいのだが、思うように進めないことを表現。

「雨がふたりのあいだに、粉々に砕けたガラスのカーテンのように落ちて来たからだ。」(一九〇頁)

(増田) 雨の降る様子。

カポージェイ (川本三郎訳) 「誕生日の子供たち」 前掲 『夜の樹』 所収。

「鳥たちは群れになって矢のように降りてくると木のあいだに姿を隠した。」(一九八頁)

(増田) 鳥の群れが一齐に降下してくる様子。

石井照子 「ひととき」 『朝日新聞 (朝刊)』 二〇一三年四月一日。

「……数々のエピソードを読むうち、固く閉ざしていた心が、温かい湯を注がれたように溶きほぐされていった。」

(増田) これは生前の夫の友人、教え子などから悔やみの手紙をもらい、生来、筆不精であった妻が、これらの手紙を読み自分の知らなかった夫の暖かい交友関係やエピソードなど夫の意外な一面を知り、悲しみを超えて、生きる力をもらっていることを表現したものである。文筆を生業としない無職(七一歳)の投稿者でもこんな素晴らしい比喻表現ができることに感動して、ここに記した。

佐川光春 『おれのおばさん』 集英社文庫、二〇一三年。

「育ち盛りの中学生たちの眠りはマリアナ海溝よりも深く、頭ではわかっているでもそう簡単に目が覚めてはくれないのだ。」(二五頁)

(増田) 睡魔、眠気の深さを表現したもの。

藤本義一「師匠・川島雄三を語る」『鬼の詩／生きてそぎの記』、河出文庫、二〇一三年。

「世の中というのは誰かに選ばれるのを待つようじゃ駄目なんだと。それよりも弟子になるとうんじゃなしに、弟子のほうからまつすぐに師匠を選ぶ権利を持つてもいいのではないか、人間というのは人を選んでいいんじゃないかと。つまりこの人に終生ついていつてもいいという人を選んでいいんじゃないかという気になったんですね。」(二五〇～二五二頁)

(増田) これは藤本が川島を師匠に選んだときの心境を語ったもの。

「嫌なことをやるから好きなことができるのがプロじゃないんですか。嫌なことを避けるから好きなこともできないのがアマというんじゃないですか」

(増田) これは藤本が川島からプロフェッショナルとアマチュアとの違いを聞かれたことへの回答である。

「天才は天分に従っていけばいいが、凡人はもともと天分なんてものがないんだから、行きつ戻りつやっていくことの繰り返しで、一パーセントをせめて一・一パーセント、一・二パーセントとしていけばいいよってことなんです。天分がなくても天職は自分で選べばいいって言ったでしょう。それを凡人が天分があると錯覚してやっていくのは気持ちいいかもわからないけど、すぐ涸渇する。だから地道に一つ一つ積み上げる出発の仕方でものにしていくもんだ。」(二七七頁)

(増田) これは前掲(一一頁)に関連する事頁で、藤本が川島から凡人は日々の積み重ねが成功への近道であることを論されたことを発言した文章である。

藤本義一「生きてそぎの記」前掲『鬼の詩／生きてそぎの記』所収。

「人間の思考を、今、仮に百とします。思考を言葉にすると百の十分の一です。その言葉を文字にすると、そのまた十分の一です。思考の百分の一が文字です。文字で飯を食っていくには、せめて、思考の百分の二、いや一・五ぐらいの表現ができないことには失格です。わかりますか、君は……。」(一一頁)

(増田) これは映画監督川島雄三の発言である。考え・思考したことを文字・文章にすることの大変さ、あるいはそれほど書く文字を大切にしろ、という意見である。

「お世辞をいうのは、愛情のない証拠です。お世辞をいうくらいなら、皮肉をいつてあげた方が愛情です。」(二四頁)

(増田) これも川島雄三の発言である。

イワン・クーシヤン作(山本郁子訳)『ココと幽霊』、富山房インターナショナル、二〇一三年。

「……言うことを聞かない自分の髪をなでて、少しでも落ち着かせようとしながら答えます。」(一一頁)

(増田) 跳びあがった髪の寝癖を表現したもの。

「外では雲が空を覆い尽くし、辺りはまっくらで、まるで蜜蜂の巣箱の上にかがんでいる大きな熊のように、暗闇が襲って来そうな感じがしました。」(一一五頁)

(増田) 雨雲が近づいてきて、空がまっくらになる様子。

「家が黄色い目で何度かウインクするように、窓から明かりがちらちらして見えました。」(一八

一頁)

(増田) まつくらな空気の中に見える家の明かりを表現したもの。

眉村卓『駅にいた蛸』、双葉文庫、二〇一三年。

「ともあれ、話はふやけつつあった。そしていささかテープレューダーの様相も呈しはじめていた。」(一一頁)

(増田) 酔っ払いが同じ話題を繰り返し、しゃべっている様子。

林芙美子「骨」北村薫・宮部みゆき編『名短篇、さらにあり』、ちくま文庫、二〇〇八年所収。

「薄明るい空に、だんだらになった白い雲が、卵の白身のように泡立っている。」(五〇頁)

古屋信子「鬼火」前掲『名短篇、さらにあり』所収。

「―じめりと湿った沼底のような古畳の上を気味悪く踏んだが、・・・」(二〇二頁)

ブツアアティ(脇功訳)「それでも戸を叩く」『七人の使者 神を見た犬』、岩波文庫、二〇一三年。

「床の上のその舌の水を凝視した。それは先端が次第に盛り上がり、溢れて数センチ進んでは止まり、また先端が盛り上がって、前へと押し出した。」(九四頁)

(増田) 床が浸水される様子。

ブツアアティ(脇功訳)「マント」前掲『七人の使者 神を見た犬』所収。

「彼は・・・。風に運び去られるように外へ出た。」(一一〇頁)

(増田) ドアを駆け出す様子。

ブツアアティ(脇功訳)「急行列車」前掲『七人の使者 神を見た犬』所収。

「機関車は・・・。いきりたつて突進しようと足で地面を掻いている獯猛な闘牛のようだった。」(二四八頁)

(増田) 機関車の初動の動きを表現。

「列車は野原を飛ぶように走った。電線がまるで癩癩の発作みたいに跳ねながら上下に躍っていた。」(二五二頁)

(増田) 列車が勢いよく走る様子。

吉田健一島内裕子編「若き日の思索」『おたのしみ弁当』、講談社文芸文庫、二〇一四年所収。

「本を読んでも、他にまだ自分が読んでいない本が幾らもあることを忘れることが出来なくて、読んでいることをゆっくり味わってなどいらなかった。」(二四頁)

(増田) 同感です。

吉田健一島内裕子編「主張が多過ぎる」前掲『おたのしみ弁当』所収。

「人間が自分で、自分に対して責任を持つてものを考えていけば、少数の意見というものが出て来るのは避けられないことであって、人間の一人々々が考えたものである以上、それが尊重すべ

きもの、つまり、何かの意味で聞くに値するものであるということとは当然である。そしてそういう意見がないというのは、自分でものを考える人間がいないこと……」(五六頁)

(増田) 少数意見の重要性を指摘。

吉田健一・島内裕子編「金銭について」前掲『おたのしみ弁当』所収。

「自分がしていることを恥ずかしく思いながら、あるいは、そういうふりをしながら、やはりその恥ずかしいと思うことをやって生きている人間ほど、みじめな感じがするものはない。」(七八頁)

吉田健一・島内裕子編「文学の実体について」前掲『おたのしみ弁当』所収。

「……人生に対する不安……が生じたとすれば、それを解決したのは文学ではなくて哲学、と言うよりも我々自身の思索だった筈である。我々の夢を育くみ、我々に夢を追う勇気を与えること、これが文学の最も純粹な在り方で……。」(一三六頁)

(増田) 文学の役割。

吉田健一・島内裕子編「評論の文章構成」前掲『おたのしみ弁当』所収。

「自分が考えることが解り易い文章になるまで考えるということが、よく考えるということなのである。」(一四二頁)

吉田健一・島内裕子編「福原麟太郎『文学と文明』前掲『おたのしみ弁当』所収。

「……自分が考えた結果を文章に表わすということはむずかしいことである。そしてここで重要なのは、自分が現に何か考えているという事実がことばによって表現を得ていることであって、これはむずかしい仕事でも、それが行われていない文章には説得力がない。……ことばを使うのが不自由な人間はものを考えることもできないから、そのような人間が何か考えている状態をことばで表わす方法もない。……ものを書く人間はまず考えることに苦勞して、それを通してことばの使い方を覚えるのであり、……。」(二四二〜二四三頁)

(増田) 考えることと、ことばの使い方との関係。

岩阪恵子「淀川にちかい町から」『淀川にちかい町から』講談社文芸文庫、二〇一三年所収。

「渡し舟にはまだ一度しか乗ったことがない。……唾が口のなかに湧いた。呑みこんでもあとからあとから湧いて出た。恐かったのだと思う。川も海も好きだったが、水は恐かった。広い川の中程までくると流れの早さがはつきりわかる。川が生きて動いて喋っていた。」(一九頁)

(増田) 水への恐怖心を表現したもの。

岩阪恵子「質朴な日日」前掲『淀川にちかい町から』所収。

「最初の一口、二口がうまい。あとは飲んでも飲まなくてもいい。酒が気付けになつて、胃袋が上向きかげんに口を開きかける。そのところへ飯を放り込んでやるだけのことだ。」(三九頁)

(増田) 酒を気付けとして飲むときの胃袋の表現。

岩阪恵子「口惜しい人」前掲『淀川にちかい町から』所収。

「三人の子供たちが口口に喉を開いて出す泣き声、それらがパチパチ顔にぶつかつてくるので、気がついたときにはもう玄関に降りていたのだ。なんとうるさい餓鬼らや、彼の頭はのぼせあが

っていた。」(六一頁)

(増田) 子供が口を大きく開いて泣いている顔は雛鳥が親に餌をもらうとき口をめいっばい開いてピーピー鳴く様子に似ている。傍で聞いているだけでイライラさせられる。

ふじたあさや「あなたの芝居で人生が変わった」と言われて」『悲劇喜劇』NO. 758、早川書房、二〇一三年二月号所収。

「書く作品書く作品、責任が生まれ、その責任が私自身の人生を決める。自分の作品に決められる人生なんだということを、痛く感じながら今日も私は、明日の私に向って書いている。」(一九頁)

(増田) これは劇作家のふじた氏が若い頃に書いた芝居を観た当時、こちらも若かった観客の一人が後年、別の会合後の質疑応答時に「ぼくはあなたの芝居で人生が変わったんです。……ぼくは教師になる決心がついたのです。」という言葉へのふじた氏の想いを述べた文章である。

増田もこの道に入るきっかけとなる書物や研究者に遭遇して、今がある。でも誰かに、「あなたの文章で人生が変わったのですよ。」と言われたことなどない。ただし、自分の書いているものには責任をまっとうしたいと思う。

はらだみずき「最後の夏休み」『最近、空を見上げていない』角川文庫、二〇一三年所収。

「……内心逃してなるものかと思いつながら、「墨ベースからリードをとるように、じりじりとその客との距離を詰めていった。」(一八六頁)

(増田) いずれの商品を購入するか思案をしている客に対し、これは千載一遇のチャンスと見てにじり寄り寄る様子を表現したものだ。

「……歩きたびに、水の入った運動靴が、カエルの鳴き声のような音を立てた。」(二二四頁)
(増田) グツチュグツチュという音。

新美南吉「和太郎さんと牛」『新美南吉童話集』ハルキ文庫、二〇一三年所収。

「酒飲みの考えは、酒の近くへくるとよくかわるものであります。和太郎さんも、茶屋の前までくると、自分の石のようにかたかった決心が、豆腐のようにもろくくずれていくのを覚えました。」(六三頁)

(増田) 好きなものには固い決心もいとも簡単に崩れてしまう様子を表現したものだ。

新美南吉「牛をつないだ椿の木」前掲『新美南吉童話集』所収。

「海蔵さんの胸の中には、げんこつのようなかたい決心があったのです。」(九五頁)

新美南吉「小さい太郎の悲しみ」前掲『新美南吉童話集』所収。

「虫が枝から落ちるように、力なく小さい太郎は格子からはなれました。」(一三九頁)
(増田) とてつもなく大きな隔絶した力の前ではなす術がない様子を表現したもの。

藤田弓子「藤田弓子」木村隆編『母よ』新潮文庫、二〇一三年所収。

「……泥酔して地球にかみつき、前歯二本を折った……。」(一一二頁)
(増田) 泥酔して、顔から転ぶ様。

藤村俊二「藤村俊二」前掲『母よ』所収。

「叱る、のは理性から。怒る、のは感情から。」(一八三頁)

長嶋有「マラソンをさぼる」『祝福』河出文庫、二〇一四年所収。

「だっただっだという靴音が他人事のように響く。体温が上昇し、思考はどんどん単純になる。苦しくて、なにかに毒づきたくなる。」(三五頁)

(増田) 息をすることのみがすべてという状況になるマラソンの途中の苦しさを表現しても。

長嶋有「穴場で」前掲『祝福』所収。

「こういうの、穴場つていわないんじゃない。皆、ここを避けてるだけだよ」(四七頁)

(増田) 花火大会で誰も取らない居心地の良くない場所を占拠し、勝ち誇る友人へ返す言葉。

長嶋有「海の男」前掲『祝福』所収。

「どうせならさあ、釣りいかない」原田の早口の語尾がわずかにあがって、疑問形と分かった。」(二二九頁)

(増田) 疑問形の表現。

長嶋有「十時間」前掲『祝福』所収。

「錠を回して少し開けてやると、冷気とともに液体みたいに素早く入り込んできた。」(二六七頁)

(増田) 戸外から猫を室内へ招き入れるときの表現。

「このミステリーがすごい！」編集部編「スイカ割りの男」藤八景』『5分で読める！ひと駅ストーリー』夏の記憶東口編』宝島社文庫、二〇一三年所収。

「私はまるで呼吸でもするかのごとく愚痴を吐き出していき、小一時間もすれば、鬱憤の巢窟と化していた腹はがらんどろとなっていた。腹の空洞を埋めるように酒も進み、・・・。」(六四頁)

(増田) 眼一杯愚痴をしゃべって、すっきりした気分で酒を飲んでいる様子。

「このミステリーがすごい！」編集部編、「昔の彼」上原小夜」前掲『5分で読める！ひと駅ストーリー』夏の記憶東口編』所収。

「あのさ。ふたりが同じ方向を見てるときは、相手の顔は見えないんだ。お互いの顔は見えなくても、ちゃんと同じものを見てるんだよ。」(七八頁)

(増田) 恋人同士がうまくいっているときの表現。

「このミステリーがすごい！」編集部編「飼育の秘ますくど」前掲『5分で読める！ひと駅ストーリー』夏の記憶東口編』所収。

「嗚咽よりも静かにドアを開け、ため息よりも静かにドアを閉める。」(一七三頁)

(増田) 極めて慎重に微音さえ立てずにドアを開ける様子。

「鼻腔にぐつと入り込んで、脳天まで一気に駆け上がっていく、強烈な臭い。」(一七七頁)

(増田) 臭いの強烈さを表現。

「このミステリーがすごい！」編集部編「さよならジnkクス蒼井ひかり」前掲『5分で読める！ひと駅ストーリー』夏の記憶東口編』所収。

「瞬間、どこかへ旅立っていた怒りが光速で帰ってきた。」(一八六頁)
(増田) 忘れていた怒りがよみがえる様子。

「このミステリーがすごい！」編集部編「夏の幻深沢仁」前掲『5分で読める！ひと駅ストーリー』夏の記憶東口編』所収。

「蝉が鳴いている。太陽が人々を蒸し焼きにしようとしている。」(二二三頁)
(増田) とにかく暑い夏の太陽を表現。

福永武彦「伝説」『幼年 その他』講談社文芸文庫、二〇一四年所収。

「口を利く時のその舌には油を差したような滑らかさがあり、・・・。」(八八頁)
(増田) すらすらと言葉が出てくる様子。

福永武彦「あなたの最も好きな場所」前掲『幼年 その他』所収。

「好きだということの中には、同時に僕を解放するものと呪縛するものとが混ざっていたのだ。」(二七一頁)

(増田) 好きなことに集中しているときは心が解放されている。一方、心が解放されるためにはその好きなことに集中しなければならぬということとは好きなことに縛られているということでもある。

杉本秀太郎「梔子」『ひつつき虫』青草書房、二〇〇八年所収。

「そとが春の日差しにあかるく暖かな日、座敷はとりわけ陰々として暗く思われ、隅々にはまだ冬が首をうなだれて座っている気配がする。」(二八頁)

(増田) 春先の室内がまだ寒々としている様子。

杉本秀太郎「鳥瓜」前掲『ひつつき虫』所収。

「息苦しい商家の日常から小半日だけ解放されたこういう日、母はつねには見せないおだやかなに綻びた顔をしていた。」(四九頁)

(増田) 窮屈な生活から解放された顔の表情を表現。

チエーホフ(神西清訳)「富籤」『カシタンカ・ねむい』岩波文庫、二〇〇八年。

「いきなり新聞を膝の上に落としたかと思うと、まるで自分の腹の上に冷水でもはねかけられたように、鳩尾のところに冷やりと実にいい気持がした。擦りたいような、空恐ろしいような、妙に甘ったるい気持がした。」(四四頁)

(増田) 新聞紙上に発表された「宝くじ」の当選番号と自分が持つくじ番号が同じであることを知ったときの驚きと嬉しさが混じったときの表情を表現したもの。

チエーホフ(神西清訳)「カシタンカ」前掲『カシタンカ・ねむい』所収。

「・・・主人の両ほおを、雨ふりの日に窓をつたわって落ちるような、きらきら光るしずくが流れ落ちた。」(二〇二頁)

(増田) 流れる涙を表現したもの。

チエーホフ（神西清訳）「アリアドナ」前掲『カシタンカ・ねむい』所収。

「仕事といたら何一つ、しも出来もしない、まあ茹でた蕪みたいにぐにやぐにやした人間なのです。」（二六一頁）

（増田）優柔不断で役に立たない人間を表現したもの。

グレアム・グリーン（高橋和久・他訳）「不当な理由による殺人」（木村正則訳）『国境の向こう側』ハヤカワ [epi. 文庫](#)、二〇一三年所収。

「『うわあっ！』その一言が詩の一行かというくらいに引き延ばされる。」（二〇二頁）

（増田）過剰な「驚き」を表現したもの。

「すでに巡査は人生のけだるい午後に入っていた。熱意で自分を売り込むほど若くもなければ、黄昏が近いといって人生をすっぽり諦めるほども老けてもいない。」（二一〇頁）

（増田）出世のない、できないことを悟り、やる気のない様子を表現したもの。

グレアム・グリーン（高橋和久・他訳）「モランとの夜」（谷崎由衣訳）前掲『国境の向こう側』所収。

「農夫を思わせるまるまるとした顔には腐った林檎みたいな皺が寄り、・・・」（二七〇頁）（増田）老人の顔を表現したもの。

「白い皮膚の下では血液細胞が、いまにも花咲く蕾のように、三杯目のブランデーを待ちかまえていた。」（二八〇頁）

（増田）アルコールを飲んで目だけでなく、顔が薄っすら赤くなっている様子。

グレアム・グリーン（高橋和久・他訳）「見知らぬ地の夢」（田口俊樹訳）前掲『国境の向こう側』所収。

「新雪がうつすらと積もった道路は走りにくかった。・・・バスはそんな道をのろのろと進んでいた。大きな競走をまえにしてむやみに筋肉を使いたくないと思っっているランナーのように。」（三一〇頁）

（増田）雪道をセーブしながら走るバスの動きを表現。

松谷みよ子「貝になった子ども」『松谷みよ子童謡集』ハルキ文庫、二〇一一年所収。

「しらじらと夜があげました。空はうす青い絹のように光っていますが、もっこりとした山と山のあいだに沈んでいるような村は、まだまだ、うすぐらいでした。」（九頁）

（増田）明け方の空の表現。

松谷みよ子「センナじいとくま」前掲『松谷みよ子童謡集』所収。

「いちめんの雪渓は風にささくれて、うろこのようにかさなりあい、ギナギナと光ってた。」（七三頁）

（増田）春先の雪原に「うろこ」のような風紋が作られる光景。

沢村貞子『貝のうた』河出文庫、二〇一四年。

「しかたがないから、たいてい黙って、口を半分あげ、見せた白い歯が、空気に乾きすぎてあと

で唇もうまくしまらないほど、いつまでもニヤニヤしていた。」(二〇八頁)

(増田)。「これは年上の男たちがこれ見よがしにする猥談を聞かされる少女の反応、聞きたくもないことを聞かされることへの反応を表現したもの。」

小川洋子編著 森茉莉「二人の天使」『小川洋子の偏愛短篇箱』河出文庫、二〇一二年所収。

「生の天使と死の使いとが門の敷居に小さな翅を休めていた、生の華やかさと、死の寂しさとが人々の胸に交錯した、それは不思議な葬式であった。」(一九八頁)

(増田)二人の幼子。一人は病に死に、もう一人は病から回復していく、その様を表現したもの。私には、こんな表現はとても浮かばない。すばらしい。

小川洋子編著 向田邦子「耳」『小川洋子の偏愛短篇箱』所収。

「手の甲の皮膚は、飛行機から見下ろす海面のように、細かい三角波が立っている。」(二三二頁)

(増田)確かに手の甲の皺は三角波のように見える。

中島らもほか著、高橋三千綱「相合傘」『輝きの一瞬 短くて心に残る30篇』講談社文庫、一九九九年所収。

「傘をさして雨の中に出ると、傘は大粒の雨に打たれて、機関銃の一斉射撃を受けているような激しい音をたてた。」(一五三頁)

(増田)雨が激しく降る様子。

中島らもほか著、篠田節子「山月忌」前掲『輝きの一瞬 短くて心に残る30篇』所収。

「理由もわからずに生まれてきて、理由もわからずに死んでいくのが、生きものの定めであり、この世の摂理なのだが、人というものは、それに無意味な理屈をつけて、あさましく悩む。」(一一六一頁)

(増田)煩惱か？無駄なことに神経を使わずに生きたい。

石井睦美『皿と紙ひこうき』講談社文庫、二〇一四年。

「男子はいつもよりはしゃいでいるように見えた。それは楽しくてはしゃいでいるのではなくて、肌にとわりつくような気持ちの悪さを力づくで剥がしにかかる、そんなふうなはしゃぎようだった。」(一四九頁)

(増田)嫌な雰囲気無理にでも解消したいようなときの表現。

東海林さだお「ビールから熱かんへ」『トンカツの丸かじり』朝日新聞社、一九九〇年。

「胃の壁がジワジワと熱く、熱い酒が温度を保ったまま胃の中にしみこんでいくのがはっきりわかる」(一〇〇～一一頁)

(増田)寒い日に熱燗を飲むときの感覚。

あさのますみ「あったか弁当・おまち堂」藤谷治・あさのますみ他『明日町こんぺいとう商店街 2 招きうさぎと六軒の物語』ポプラ文庫、二〇一四年所収。

「・・・、ずつと蓋をしていた気持ちだが、ドクンとあふれ出すのがわかった。私は、黙って頷いた。」(五一頁)

(増田) 誰かに背中を押されて、自分の決心がついたときを表現。

「返事をしようと思うのに、言葉は喉に貼りついたかののように、何も出てこなかった。」(六三頁)
(増田) 他のことに心がとらわれて、ぼんやりしてしまっただけを表現。

「呆然とする私の前で、担当編集者の煙草のけむりが、ゆっくりと空気にとけていった。」(七一頁)

(増田) タバコの煙の流れから心がぼかんとしている様を表現。

安澄加奈「水沢文具店」前掲『明日町こんぺいとう商店街 2 招きうさぎと六軒の物語』所収。

「この店、ノートがたくさんあるじゃないですか。・・・毎日毎日、まだなにも書かれていない真っ白なノートに囲まれていたら、あるときふと、自分の人生も、こんな風に振り出しにもどったんだと思えて。そうしたら、無性に、そこになにか書きたくなっただけです。」(一一五頁)

(増田) 真っ白なノートに自分の再起を見出したときの表現。

安岡章太郎「宿題」『ガラスの靴』悪い仲間』講談社文芸文庫、二〇一三年所収。

「・・・、説明しようのないある期待で僕の胸は水を吸ったように重くなる。何かしら、きょうこそはと思う。」(五八頁)

(増田) イヤな気分が胸に充満してくる様子。

「僕の胸はあたりの空気と同じくだんだん黒くなって行く。」(六〇頁)

(増田) やらなければならぬ宿題に手がつかず、夕方を迎えてしまったときの心模様。

「・・・明日がそのまま消えて今日になってしまったことが、何かにダメされたようだ。」(六六頁)

(増田) やって見たかった徹夜をした朝の印象を表現。

安岡著「蛾」前掲『ガラスの靴』悪い仲間』所収。

「・・・、私の顔をじっと、肉屋の前をとる犬のような淋しい眼付きでみる。・・・私がかまっ
ていると、・・・トコトコと一歩一歩、地面に針を刺すような足どりで帰って行く。」(一一五頁)
(増田) 何度も何度も声をかけても相手にされず、ついに諦めた様子。

安岡著「陰気な愉しみ」前掲『ガラスの靴』悪い仲間』所収。

「・・・やっと私は落ちつき場所を得た思いに、腰かけた尻からスワッと疲れがぬけて行く。」(一二二頁)

(増田) 安堵の表現。

小川洋子『朝日新聞』二〇二二年十一月二日、朝刊。

「かつて幼かった息子が「じょうずに書けている」と励ましてくれた言葉を「あめ玉を口に含むように」思い出しながら、書き続けてきた。」

「・・・小説は、声を出せない人の声を届けるためにあると思います」

(増田) これは紫綬褒章受章インタビューへの答えである。うーん、あめ玉を口に含むように、

つて。小説を書く者の責務。

塩野米松『木の教え』ちくま文庫、二〇一九年。

「癖を生かす、個性を生かす、生かす場所をさがす。これがこの世に生まれてきたものを大事にする考え方です。」(一一三頁)

(増田) 木の個性(節、こぶ、曲がり)をじょうずに生かすことにちなんだ人人生訓。

稲垣吾郎『朝日新聞』二〇二二年十一月七日、朝刊。

「なぜ読書をするのかといったら、やっぱり足りないと思うからですよ。知識に教養、知らないより知っていることが多いほうがいいから。・・・自分の中の貯金ですよね」

(増田) 読書を通じて得る知識、教養を表現したもの。

宮部みゆき『僕のルーニー』『真藤順丈リクエスト 絶滅のアンソロジー』光文社所収。

「わたしはぬかるみの急斜面に張りついているようだった。泥に指を突き立て、這い上がろうともがけはもがくほどに、その反動でずり下がってしまう。」(一六七頁)

(増田) 夫の浮気、本音を暴けない、もどかしさを表現したもの。

東山彰良『九十九の憂鬱』日本文藝家協会編『ベスト・エッセイ 2020』光村図書。

「自己嫌悪や劣等感が言葉を磨いてくれることに気づいたのは幸いだった」(六七頁)

(増田) 体験が言葉に結実する。選ぶ言葉や文体は身体性(体験)に由来することを表現したものの。

「好きなことをひとつやるためには、好きでないことを九十九もやらなければならない」(六八頁)

(増田) 多くのしがらみの中で生きていることを表現したもの。

木ノ下裕一『信じるチカラ』前掲『ベスト・エッセイ 2020』所収。

「総じて、人が不安になる時は、何かを信じられなくなった時だ。家族や仲間、社会、そして自分自身・・・それらを信じられなくなった途端、私たちの目は曇り、世界がくすむ」(八二頁)

(増田) 不安を誘発するメカニズムを表現したもの。

最相葉月『毎日が新しいという生き方』前掲『ベスト・エッセイ 2020』所収。

「忘れるというのは毎日が新しくなることで、それは新しい生き方ではないか・・・」(一一六頁)

(増田) 認知症患者を「無脳者」としてみるんじゃない、ポジティブに受け取ることを表現したものの。

鳴津輝『狂熱の黒部』前掲『ベスト・エッセイ 2020』所収。

「ショーケースを抱え込むように私は原稿(複製であったが)に見入り、ガラス面を鼻息で白く曇らせた」(二九九頁)

(増田) 鼻がくっつきそうな光景を表現したもの。

佐藤雅彦『葉と山椒魚』日本文藝家協会編『ベスト・エッセイ 2021』光村図書。

「この些細な出来事は、なぜか独特なざわつきを持って心に残った。」(二六頁)

(増田) 心が乱されることを表現したもの。

黒井千次 『枝の家』 『枝の家』 文藝春秋、二〇二二年所収。

「……、と相手は自分に言いよかせるように低い声で告げながら、その言葉を自分の身の底に打ち込むかのように小刻みに頷いてみせた」(二七頁)

(増田) 深刻な立場にあることを表現したもの。

「シーと歯を食いしばるようにして小さな音を吐きながら、相手は空いている方の手の指を立てて車のワイパーのように横に振った」(三三頁)

(増田) N〇、N〇を表現したもの。この振り方の速度によってN〇の強さが表現できそうだ。

「妻は疑問で背中をふくらませたまま、家の奥へと引上げていくらしかった」(四二頁)

(増田) これは難解だ。直面していることがいかにも疑問であることを表現したもの。

黒井千次 『同行者』 前掲『枝の家』所収。

「機械は小さな切符を引つたくるように奪って乾いた音をたてた」(六七頁)

(増田) 改札機に切符を入れたときの様子。

黒井千次 『報告』 前掲『枝の家』所収。

「女は急にこちらを押しつけて部屋を出る。濡れた野菜のような匂いが顔にかかった」(一〇五頁)

(増田) これは難解だ。「濡れた野菜のような匂い」とはどんな匂いなのか。

黒井千次 『空の風』 前掲『枝の家』所収。

「生まれ故郷は、ただそこで生まれ落ちたから故郷となるのではあるまい。その後、物心がつき、幼年時代を過ごし、少年期や少女期を経て思春期に至るまで、数知れぬ記憶の断片が身の内に刻まれるからこそ、それが土地と一体となって懐旧の念を呼び、望郷の渴きを誘うのであろう。生まれ故郷は、思い出すことによつて育ち、懐かしむことによつて熟す。生まれ故郷を得るためには、長く生きねばならぬわけである」(一六五頁)

(増田) まさに故郷の定義だ。

鷺田精一 『長引く夫との冷戦状態』 『二枚腰のすすめ』 世界思想社、二〇二〇年、所収。

「夫婦という関係は、ほころびをそのつど繕うという努力のなかでしか続きません。その小さな努力の積み重ねを互いの内に確認できたとき、苦労は感謝に裏返ります」(一〇三頁)

(増田) 危機に直面しても、もう一度ゆつくり縫い直せばいい。無くしたボタンを付けることと同じ。

乗代雄介 『旅する練習』 講談社、二〇二一年。

「できたー！」とためたバネのように上半身を跳ね上げ、手のひらをこちらに向けた」(二七頁)

(増田) いかにも「できたー！ やったー！」という感情を動作で表現したもの。

「あ」と頭に電球が灯つたのが見える」(四二頁)

(増田) 何かが、ひらめいた瞬間を表現した。

「みどりさんの濡れた頬はもう涙のための奇麗な道をつくらなかった」(二二三頁)

(増田) 決心を表現したもの。

安野光雅「本さえあれば」『**芸術新潮**』新潮社、二〇二二年、九月号所収。

「読書は目と字と頭を連動させるスポーツで、幼少期からの訓練と習慣づけが必要だ……。」「(八八頁)

(増田) 読書好きになるには訓練を要する。また、読書は身体性をともなうこと。

森田真生「**「わかる」と「わからない」のあいだで**」前掲『**芸術新潮**』新潮社、所収。

「知識は誰かから与えてもらうことができる。だが、わからないところから出発し、わかるころまで至る道は、自分の思考の力で歩むしかないのである。……自分の眼で見た事実から、その奥にある真実へと歩んでいくためには、「考える」ことが必要なのである。考えることは、あそぶことと似ている。それは、可能性を探索することである。既知の意味を逸脱することである。未知と出合うことである。」(四〇頁)

(増田) 考える姿勢の大切さ。

ウスビ・サユ「自力で学ぶ」『**自学**のすすめ』『**Kotoba 46 独学の愉しみ**』2022年冬号、集英社、二〇二二年、所収。

「私は、いつも学生たちに「勉強は、教室ではできないよ」と言っています。教室は、情報伝達の場にすぎないし、知識を蓄える場所ではない。学校で先生が与えているのは、あくまでも一つの情報にすぎない。その情報を知識化することは「独学」の部分なんです。」「知的な営み」というのは、自分が受け取った情報をいかに深め、掘り下げていくかが基本です。」(三二頁)

(増田) 教えられることと、勉強は違う。勉強は教室外で自分でするもの。

森絵都「**風と雨**」『**あしたのことば**』小峰書店、二〇二〇年、所収。

「……かみさんのいた場所は、かみさんにしかうめられない。どんなに部屋をにぎやかしても、おいらのなかにはしんとした穴がある。」(二五八頁)

(増田) 自分よりも先に逝った妻への思慕を表現したもの。

森絵都「**こりす物語**」前掲『**あしたのことば**』小峰書店、所収。

「おなじふうなものを見られないあいてと、おなじように心をかよわせあうのは、なかなか、かんだんではありません。」(七〇頁)

(増田) 共感しあうことの難しさを表現した。

砥上裕将『**線は、僕を描く**』講談社、二〇二〇年。

「何も知らないことがどれくらい大きな力になるのか、君はまだ気づいていないんだよ。」(八一頁)

(増田) 何も知らないから、ありのままに見ることができ。

「ただできてても、未熟だ、と言ってもらえるということはあるがたいことだよ。」(二四七頁)

(増田) 大家たいかと呼ばれる人物になっても、つねに批評を受け、さらに精進するという姿勢。だから大家になれる。

「なぜ、もつといっしょにいられなかったのだろう？

なぜ、もつと多くの時間をいっしょに過ごせなかったのだろう？

なぜ、僕はいっしょにいる時間をたいせつにできなかったのだろう？

なぜ、僕は取り残されてしまったのだろう？

なぜ、僕は生きているのだろうか？

そして、暗い感情とともにいつも湧き起こってくる疑問は、

「どうしてこんなことが起きてしまったのだろう。」（一九七頁）

（増田）大事なものを失ってはじめて知るその存在の大きさ、貴さ。

「できることが目的じゃないよ。やってみることが目的なんだ。．．．今いる場所から、想像もつかない場所にたどり着くためには、とにかく歩き出さなければならぬ。自分の視野や想像の外側にある場所にたどり着くためには、歩き出して、何度も立ち止って考えて、進み続けなければならぬ。」（二六二頁）

（増田）勇気をもつて一歩踏み出すことの大切さ。

山極寿一・小川洋子『ゴリラの森、言葉の海』新潮文庫、二〇二一年。

「．．．親子の関係って．．．親であり続けるためには、食事を与えるという非常に重要な関係をやめてはいけないのかもしれない。．．．家族とは何かと考えれば、毎日一緒にご飯を食べる相手ということになりますね」（二六二〜二六三頁）

（増田）普段、忘れてのこと。一緒に食事を摂れる家族の存在の貴さ。

「．．．愛は、自分の時間を相手に与えることによって作られる。愛している相手に時間を費やすことを厭わない。それが自分を捧げるということでもあるんです。」（一八八〜一八九頁）

（増田）自分にとって大切な時間をも捧げる、それが「愛」。

「自然界の中では、生と死はともあつさり切り替えられるものなんです。人間のように生にあまりこだわりません。死を特別なものとしてしまったことが、人間の世界観を変えました。だからこそ、未来という考えができた。未来というのは自分が死ぬまで、あるいは死後のことでしょう。」（一九八頁）

（増田）死があるから（そこへ行き着くまでの）未来を計画する。

井手英策編『壁を壊すケア「気にかけてあう街」をつくる』岩波書店、二〇二一年。

（増田）タイトルに魅かれた。いわゆる社会的弱者（被介護者、精神病患者、引きこもり、他民族など）は施設、病院などの「壁」の向こう側へ閉じ込められがちである。あるいは、別の人格者として仲間から排斥（壁を築かれる）されがちである。それに対応する人間たちも「壁」の内の人として「壁」を築かれがちである。この国ではそんな「壁」を作り対応することをケアと捉えてきた。本来のケアとは「相手のそばにいて、相手を気にかけて、相手の立場に立って、一人称の気持ちで、相手を慮ることだけだ」（二八頁）そのためには世の中に築かれた「壁」を取っ払うことから始めなければならない。本著はそれを実践している事例を紹介した好著である。

石井正広「第2章 社会が若者を失うまえに 一校内居場所カフェの実践から」前掲『壁を壊すケア「気につけあう街」をつくる』所収。

「人に貼られたレッテルは「なにくそ!」と剥がすことが可能だが、自分自身で貼ってしまったレッテルは剥がすことができなくなってしまうのでタチが悪い」(七二頁)

(増田) 生きていく上で「自尊心」をいかに育むかは、老若男女の違いに関わらず、最も大切なことである、を表現している。

名里晴美「第5章 重い障害のある人が生きる街」前掲『壁を壊すケア「気につけあう街」をつくる』所収。

「福祉とは、何らかの生きづらさを抱える人へ提供される、いわゆる支援を指すのか。いや、出会った人と人が思い合う、そしてそこから何かが生まれる、その幸せを感じられることが福祉なのではないか」(二二七頁)

(増田) 他者と気遣い合うこと、繋がっていること、そのものが幸せである。

「インタビュー① 弁護士 島昭宏」ドリアン助川『プチ革命 言葉の森を育てよう』岩波ジュニア新書、二〇二二年所収。

「……専門分野を作り上げていくのは言葉の力だから、専門って言葉のことなんだよ」(二〇七頁)(増田) どんな仕事もその仕事に相応しい、その仕事のみで使用される言葉がある。それはその仕事を専門にしているからだ。経済学の言葉、心理学の言葉は、すべて専門用語である。

「インタビュー② 歯科医師 大野純一」前掲『プチ革命 言葉の森を育てよう』所収。

「……相手がわからないことを言っているのは相手が悪いからだと思うようにしたんです。……自分のリスニング能力のなさを相手のせいにしちゃうんです」(二二三〜二二四頁)

(増田) 外国語を修得するときの1方法である。こう開き直って、こちらから質問をして一つ一つ確認していく。するとコミュニケーションる力もつく。

「インタビュー⑥ 映画監督 河瀬直美」前掲『プチ革命 言葉の森を育てよう』所収。

「……言葉を発する風景をとらないと。それが映像言語ね」(二〇八頁)

(増田) 映画監督には風景が発する言葉も聞き取れるようだ。

「天声人語」『朝日新聞』二〇二二年十一月二十一日。

「誰かと出会って暮らし始め、一緒に老いていく。それがいかに幸運なことであるかを改めて思う。……何度も何度も同じ話をする。何度も同じ道を一緒に歩く」

(増田) 夫婦の定義。11月22日。「いい夫婦の日」です。

河合隼雄「第5章 自然について」『宗教と科学の接点』岩波現代文庫、二〇二二年。

「ヨーロッパにおける神の死の自覚がより深く神への接近をもたらしつつあるように、日本において「自然」の死を自覚することが、自然のより深い理解をもたらすであろう」(二五六頁)

(増田) 日本といわず人類は、もう「自然の死」を自覚すべき時である。環境破壊は酷すぎる。

「荒井裕樹の生きていく言葉 訊けなかったから自分で」『朝日新聞』二〇二二年三月九日。

「人生に悲しみの地層を刻んだ人の静かな強さに接した気がして、思わず言葉を呑んだ。……訊

けなかったものは自力で追い求めるしかない。だから自分は、学者を続けている」
(増田) 過去の不幸、不条理をすべて優しく受け入れてきた者の慈愛を表現したもの。その慈愛がどこからくるのか訊き損なつた。学者とは、その知り得なかつたことを自ら問い、自らその答を求める主体である。

瀧羽麻子『博士の長靴』ポプラ社、二〇二二年。

「ほんの一瞬で、雨が段違いに強まったのだ。それこそ雲の中にある無数の蛇口を、誰かが片っ端からひねって回つたようだった」(二八頁)

(増田) 突然、夕立に遭遇した様子。

ヤマザキマリ(2022)『壁とともに生きる わたしと「安部公房」』NHK出版新書。

「……布で覆われた顔から覗く二つの老木のウロのような目からは、彼女の心情をうかがえるような表情は全く読み取れない」(六九頁)

(増田) 乾いた人間性を表現。

森絵都『新しい作風への挑戦』『季刊 読書のいずみ』NO. 170、全国大学生生活協同組合連合会、二〇二二年。

「言葉ってインプットしていかないと枯れてしまうので……」(十一頁)

(増田) だから、活字を読んで「言葉」を蓄えるのです。

今村翔吾『夢をかなえるヒント』『季刊 読書のいずみ』NO. 171、全国大学生生活協同組合連合会、二〇二二年。

「多様性というのはいろいろできることであり、いろいろ掛け合わせられることでより希少性が高くなる……」(六頁)

(増田) 誰もやっていない文体への挑戦。

今村前掲『季刊 読書のいずみ』所収。

「人はなぜ名を残そうとするのか……人間には死んだ後も誰かに覚えてほしいという欲求があるんだろうなと」(十頁)

(増田) 物を書き残すという作業もそんな欲求から起こるのか。

(つづく)